

次 目

遺文に於ける五大要義(四)……………	本 多 日 生
開 目 鈔 講 話(第四十六講)……………	小 林 一 郎
本佛實在の宗教哲學(十八)……………	河 合 陟 明
大東亞建設と宗教……………	平 山 三 藏
記 事	
○本部園報	
○福島教信	
○入帳報告	

號 月 二 十 年 七 十 四 第



法財人團
統

一團發行

財團 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正統ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會
アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ
又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者
本多日生上人運化後其遺命ヲ遵守シ進
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セン
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ
第一佛祖正統ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ
教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ
寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永
久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ
最も根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團畧則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シ
テ佛祖正統ノ法統ヲ擁護シ我國精神文
化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ振振ヲ
培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ
理想ノ文明ヲ建設セバ街頭布教並ニ
教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」
ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參
百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セ
ラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五
圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金
貳圓五拾錢ヲ贈出セラル方ヲ正團員
トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ
適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ
無料ニテ頒布ス
- 誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

遺文に於ける五大要義 (四)

本多日生

三、十界互具の妙體

第三には十界互具の妙體といふことであるが、これは吾々人間の本體に就いて言ふので、人間その
者が十界といつて、地獄より佛にいたる迄の十の性質を互に具へ合うて居る不思議な體である。さう
して人間の心は無論始なく終なく續いて行く存在者であつて、生れる時分に新しく出來たものでもな
く、死んで行く時分に消えて行くものではない、ズツと始なき已前より傳はつて來て居るものが我が
魂である。斯ういふ魂といふものを、何にも無い所から拵へ出すといふことは出來ない。隨つてこれ
を奪ひ去ることも出來ない、自分の魂は始めもなく終りもなく存在するものである。その存在の内容
は、單に人間だけときまつて居るものではない、その心の内部を分解すれば十の性質がみな具つて居
る、地獄の性質もあれば佛の性質もある。

地獄の性質といふのは、腹を立てる事が即ち地獄の性質となつて居る。腹を立てない人といふ者は

一人もない、どんな人でも不意に行つて頭をコッソリと叩けば、スグ腹を立てる、それは地獄の性質である。その次の餓鬼の性質といふのは慾張り根性を言ふのであるが、これも慾張りの心無い者はない、それは金銭など欲しがらぬとしてもその代りに酒が飲みたいと言つたり、酒は欲しがらぬでも又植木が欲しいと言つたり、或は風景が見たいと言つたり、いろ／＼そこに欲心といふものがある。「風景が見たいと言つて、昨日鎌倉へ行つたぢやないか」「鎌倉は見ただけでも今日は箱根が見たい」……さういふ風に欲望といふものは昨日どんなに満足しても、今日はまた新しくそこに欲望が燃えて居る。それは人に依つて各々その程度は違ふけれども、なか／＼人間の欲心といふものは限りなく旺盛なものである。寝たいといふことになる。「お前いま晝寝をしたばかりぢやないか」「晝寝はしたけれどもまだ睡たい」……ナンボでも欲望は出て来る。酒は飲みたいといふ者は、「あなた今日は晝間から飲んだぢやありませんか」「晝間は晝間だ、晩は晩で飲むのだ」といふ風に、制限なく起つて来るものであるから、それを餓鬼の性質といふのである。それを形に現はして来れば、飲みたい／＼と思ふけれども飲むことが出来ない食ひたい／＼と思ふけれども食ふことが出来ないといふ所謂餓鬼の姿になつて来る、それは少しづつでは誰でも現はして居る譯であつて、自分の家で晩の御飯を食べて居つても「あゝ今夜はうまい鮎が食べたいけれども冷飯で我慢しなければならぬかナ」「お汁粉が食べたければお茶を飲まなければならぬかナ」……といふ風に、やはりそこに欲望は燃えて居る。看

物は見て居るけれども、「鮎の肴物が看たいのにメチンスの肴物しか看られない」と思つて居るから、半分は満足して居るやうだけれども、半分は欲心の燃える餓鬼の心が動いて居る。だから何處まで行つても餓鬼の性といふものが人間にあることがわかる。それから畜生の性といふのは、物の道理がわからぬといふことである、人間はよほど物のわかつたつもりでもわからぬ事が澤山ある、人間が死ぬといふ事でも、他人は死んで行くといふことは能くわかる、だから隣家の親爺が六十、七十になつたといへば、「モウ前進が短いナ」といふことはわかるけれども、自分のことになると、「俺は六十になつたけれども、まだ／＼確かなものだ、俺は健康だから特別だ」といふやうに考へて、自分の死といふことがわからない、そこで病氣になつていよ／＼難かしいといふ事になつても、「ナーニ薬を飲めば癒るだらう」と思つて居る、醫者の方はモウ匙を投げて居るのだけれども、家族の者はサウとも言へないので、「今日は大變よろしいやうですネ」と言へば、本當に快くなつたやうに思つて、何處まで行つても死の刹那まで自分だけは死なぬやうに思ふ。さういふ所に道理のわからぬ性質が誰にもある。男女の関係でもやはりさういふ風なもので、所謂戀は人を盲目にするといふ、俗にあばたも笑靨といつて、あばた面でも笑靨が出たやうに見えるといふ、それは少し極端だけれども、戀の爲めにはその人の缺點を却つて長所と思ふ位の所まではデキ調子外れになるものである。さういふ風に何事に就いても道理のわからぬ所があつて、それが爲めにいろ／＼喧嘩が起るのである、姑婆さんは

婆さんでさういふ判断の間違つた標準から、自分の考が善いやうに思つて叱言をいふ、嫁は嫁で自分の考が善いやうに思つて一生懸命に言ひ張る、終ひには首を吊つて死ぬ位まで本氣になつて喧嘩をする。側から聞いて見るとどつちも言ひ方が間違つて居る、首を吊るところではない、『そんな事で喧嘩をするより晝寝でもした方が宜からう』といふやうなことである、それを眞赤な顔をして一生懸命に唾み合つて居る、そこらはやはり愚痴といふものである。

だん／＼考へて見ると人間にはいろ／＼の性質がある、さういふ悪い方面ばかりではない、上の方に行くともまた優しい心もあり、なか／＼善い性質がある。前に言ふとほり『側歴の心は仁の端なり』といふやうに、どんな人間でもさういふ優しい考を有つて居る。また『是非の心は義の端なり』といつて、大抵の事は物の道理、善悪がわかる、自分の事になるとわからんけれども、他人の事ではよくわかるのである、『晝寝をした方が善いか、しない方が善いか』といへば、『それは晝寝などはあまり衛生にも良くない、時間も潰れるからせぬ方が宜からう』と答へる、『然らばお前は……』といふと俺は今日チト頭が重いから……』といふやうな事で晝寝をやり出す。自分の事ではわからんけれども、他人の事であつたら大抵のことが判断がつく、さういふ立派な性質を人間は有つて居る、それが十分に發揮されて能くはたらくやうになれば、だん／＼佛様の智慧に近づき、佛様の慈悲に近づき性質のあることがわかるのである。

新様にして人間の心には十界といふ十のものが残らず、具はつて居るといふことを、法華經はハッキリ説いて居る。佛様のやうな尊い所もあり、地獄のやうな浅ましい所もある。それが何に依つて現はれるかといふと、日蓮聖人は『業感の氷』といふことを『總在一念鈔』といふ御遺文に言はれて居る、

『譬へば水の全體寒じて大小の氷となるが如し、仍て地獄の身と云うて洞然猛火の中の盛なる焰となるも、乃國世界の體と云うて色相莊嚴の身となるも、只是れ一心の所作なり。之に依て惡を起せば三惡の身を感じ、菩提心を發せば佛菩薩の身を感じるなり。是を以て一心の業感の氷にとぢられて十界とは別れたるなり。』

業感といふのはモト／＼自分のしわざである、そのしわざが物を感じて來る、地獄に行くやうな悪い事をすれば地獄の結果を感じて地獄に墮ちる、佛になるやうな善い事をすれば、その善業の報ひで佛様が出て來るといふ、その『業感』といふことが法華經の尊き教である。何もこれは他から持つて來てくつ附けるのではない、自分の一生の間の考へ方と、爲した仕事とに依るのである。

それ故に人間の一番大事なのは、自分が一生の間に善を爲すか、惡を爲すかといふことである。その他の事はみな消えてしまふ、何といつても現在生活の上にいる／＼溜め込んだやうな物は、全部置いて行くといふか、消えてしまふものである。考へて見れば此も一時、彼も一時であつて、どんな御馳走を食べてもそれはその時だけのものである、所謂瞬間の幸福に過ぎない。昨日御馳走を食べたか

ら今日は何にも食はずに居れと言はれたら我慢は出来ない、やはり茶漬でも宜いから食べさせて貰ひたいといふことになる、昨日三圓の御馳走を食べたから三日ばかり食はないで居るといふ譯にはいかない。さういふ物質的の喜びといふものは、みなその時々で消えて行つてしまふのである。だから唯だ一度だけ立派な御馳走を饗されるよりも、それを引伸して、始終さういふ御馳走の幾分でも食べさせて貰ふ方が、人間としては幸福である。一時非常に景氣が好くて金が入つて、立派な着物を着て自動車に乗つて御馳走を食ひ歩いて、さういふ生活は三月か半年で、それから後は貧乏になつてその日の米にも困るといふやうなことになるのは、やはり幸福な生活とは言へない。さういふ譯で物質の生活といふものは永續しない、人間は一生涯を通じて爲すところの善と惡、それに依つて永遠の向上と沈淪といふことが別れるのであるから、どうしても先づ物質的の生活の方面は成べく切詰めて、悪い事をしないやうに心掛けて行かなければならぬのである。一時の口腹の喜びといつて、美味しい物を食つたり、良い着物を着たりといふやうな事のために、若し罪を犯したとするならば、その食物は消えてしまひ、着物は破れてしまつても、罪だけは消えずに残つて、忘れた時分に「チョット出て来い、貴様は斯う罪を犯したではないか」といふことになる。泥棒などのやつて居る事はそれである、盗んだ金ナンといふものはデキに使つてしまふ、ところが罪の方は證據がついて警官に捕まへられて、三年も五年も牢獄で呻吟しなければならぬ。そんなやうな譯で人間も一生ウカ／＼と暮してしまふと、表面はマア幸福のやうに見える、「私も幸福なことにあたり苦勞もしないで、美味しい物も相當に食べ

て來ました」と言つて居るけれども、一たび息を引取つたら青鬼がやつて來て頭をどづかれて「コラッ……さうなつてから『あゝしまつた、やり損つた』と言つても追つかないから、そこで佛法を信する以上に於てはこの業威の氷といふことを能く考へて置かなければならぬ。それが人間自身に就いて考へる場合に大事なことである、自分の心には善いものもあり惡いものもあるから、その善い方はたらかして悪い方を押へて行くといふことに心懸けなければならぬ。

その場合に最もよろこばしいのは、法華經を信心することに依つて一切の罪を消し、功德善根を譲り與へていたゞくことが出来るといふことである。その意味は日蓮聖人が「女人往生鈔」といふ御遺文に

「當世の女人は喜ばしかるべきなり」

と仰せられて居る。それはどういふ事かといふと、同じ法華經でも、法華經の眞實を顯はして信することの出来る當世である。法華經は釋尊の時からズツと傳はつて來たけれども、その眞實が弘められなかつたが爲めに、法華經を信心するといつても横道のことを信じて居る、例へば普門品を信心して觀音様が有難ナンと思つて居るのは、成佛といふ事にも何にもなりはしない。觀音様は何を護つて呉れるかといつたら、泥棒が入られないやうにするとか、子供が欲しいと思ふ時分には標幟のいゝ子供を與へてやるといふやうな事が澤山説かれて居るけれども、さういふ事柄は今日宗教的の信念に依つて願ふ必要はあまりないのである。泥棒が入らぬやうにしようと思へば戸締りの用心をするが宜い

し、良い子供が産みたいと思つたならば身體を丈夫にして、さうして攝養をして行かなければならぬ、いくら觀音様ばかり信心して居つても、不味い物ばかり食つて居つたら瘦せてしまふ、又自分の體に病毒があつたりしたならば子供に遺傳する、例へば梅毒にでも罹つたならば、いくら信心しても生れる子供は眼病になるとか、精神病者が出るとかいふことになる。さういふ生理衛生に關する事は宗教の信仰ではない、それは衛生學の上から注意して行けば宜いので、宗教の信仰を要するのは精神的の方面に於て、どうしても宗教ならざるべからざるものがあるのである。

その時に當世は幸にして日蓮聖人が出られて、法華經の一番眞實のところを弘められて居るのである。その事を女人往生鈔に言はれる、同じ女人に生れても、或は佛法已前に生れるとか、佛法已後であつても法華經の眞實の弘まらざりし時代の女人は救はれないけれども、當世は法華經の前に申す信仰の尊き教が弘まつて、女人と雖も法華經を信じて成佛得道の出來る今日であるから、その時に生れた女人は最も幸福である。殊に法華經には『後五百歳の女人』といふことを説かれて、釋尊が入滅せられてから二千年経つて已後の女人は殊に法華經に依つて救はれるといふことがある。チョウド菊の花は秋の時候になつて美事に咲くやうなもので、物には時節がある、それは夏菊といつて夏咲く菊もあるけれども、秋になつて本當の美しい菊花が咲くやうなもので、今日末法に生れた女人は、法華經に依つて御利益を受ける時ぢやと言はれる、それは確かにさういふ關係に置かれて居るものである。殊に法華經のさういふ意味の尊きは、お釋迦様の有難いことがハッキリと顯はれて來た點である。

むかし法華經を信じた者は、法華經の何處を信じたかわからない、提婆品を信心するといふことを殊に女の人は言ふが、提婆品にはなる程女人成佛といふことがある、併しそれは女人が成佛したといふ事が書いてあるだけで、どうして成佛するのかといふことになれば、壽量品の釋尊の顯本といふことを信じなければやはりハッキリしないのである。或は陀羅尼品を讀むといふ、陀羅尼品には鬼子母神が法華の行者を守護るといふことが説いてある、さういふ枝葉の所を有難く思つて、法華經の中心思想である壽量品の本佛を尊信するといふことを知らなかつた。今でも女の人はたいいて提婆品を讀んだら有難いと言ふけれども、提婆品は龍女が成佛をするについて、文殊師利菩薩の教化を受けた、智積菩薩や舍利弗がそれに反對をした、けれどもそれを押切つて龍女が成佛をしたといふ話を書いてある。その龍女が眞に救はれる者は誰であるか、龍女が喜んで讃歎の語を發して居る對手は誰であるかといふことを考へなければならぬ。龍女は釋迦如來に對してその喜悅感謝の言を申述べて居るのである。その大事な釋迦如來のことを忘れてしまつて、『提婆品で女人が成佛したから提婆品が有難い』……それは皆な素人の考である。さういふ誤解が除かれて、壽量品中心の法華經として弘まる時代に女人が法華經を信ずるといふことは、こんな喜ばしい事はない。その意味を日蓮聖人は『法華取要鈔』に

我等衆生は五百塵點劫より已來教主釋尊の愛子なり

と仰せられて、始めもなき已前より吾々が生れかはり死にかはりする、そのいつの時にもお釋迦様の

御慈悲の中に導かれて来たのである。吾々が今日茲に人間に生れて、同じ人間の中でも法華經を信するやうな縁が向いて来たといふことは、自分だけの力でない、やはり釋尊の大慈大悲が特別に吾々を此の信心に向ふやうに導いて下さつた、前の生からの因縁もあり、今日もまた釋尊の教導を受けて我等はこの信心に入ることを得たのである。

この『教主釋尊の愛子なり』といふ自覺に立つことが、人身觀上に於て一番大事なことである。人間が十界具足の妙體であるといふこと、今日の女人は法華經を信するに壽量品中心の思想に依つて信することが出来る、さうして我は釋尊の愛子であるといふことを自覺したるとき、それが本當に人間の人身のことを考へ得たものである。自分の方に尊い性質があるといふことを忘れては駄目である、さうしてそれが尊き地位を有する、即ち佛子の自覺といつて、佛の子である、お自我偈に説いてあるとほり『我も亦これ世の父』である、汝等は我が子であると仰せられた、その尊き釋尊と我等は親子のやうな關係に於て導かれて居るといふことを信じなければならぬ。チヨウド世間で言へば親が最も有難いが如くに、世間の親の功の及ばん所までお釋迦様の御力は及んで下さる、世間の親は子供が地獄に行くとか、餓鬼に行くとかいふやうな流轉を辿る時分には、それをどうする力も無いのであるけれども、お釋迦様は吾々の流轉を救はんが爲めに、大慈悲の御手を伸べて下されるのである。この世に於て親の思は大事なことであるけれども、更に吾々の心の方から考へれば、お釋迦様は心の親である。その事をよく考へて佛子の自覺に立たなければならぬ。(此項畢)

開目鈔講話

(第四十六講)

小林一郎

この間は法華文句の中にあります問答の問ひの方だけを讀みました。その問ひといふのは、或る時には法華經の安樂行品のやうに、人を攻撃するとか、責めるとかいふことをしないで、優しく教を説くといふことも必要である。又或る時は涅槃經の中にあるやうに、人を責めてもかまはぬ。場合に依れば教をしても已むを得ないといふやうなことがあるが、それ等のことに就いてどういふ風の根本的の覺悟をしたら宜からうかといふ問ひになつて居りました、それに就いての答に今日は入ります。

答ふ大經には偏に折伏を論ずれども、一子地に住す、何ぞ曾て攝受なからん。此經には偏に攝受を明せども頭破七分と云。折伏なきに非ず。各一端を擧て時に適ふのみ等云云。

答へて言ふには、答へてといふのは法華文句の中の文でありまして天台大師の説であります。その天台大師が言ふには、大經即ち涅槃經には、前に申したやうに、場合に依れば武器を持つて闘つても宜いといふくらゐに強く説いてある。併しながらその間違つた者を責めるといふ場合の心の持ち方はどう持つたら宜いかといふことを教へて『一子地』と言つてある、一子地といふのは最も大きな慈悲の心持、一子といふのはたつた一人の子供です。マア子供は幾人あつたつて、子供の可愛いことに變りはありませんけれども、殊に一人の子といふものは親連は大變可愛がるものであります。親連がたつた一人の子供を可愛がるやうな心持を以て一切の人に接するといふことが佛の慈悲です。それが一子地であります。本當に一人子を可愛がるやうな心持で佛様は法華經の中にも一切衆生は皆自分の子であるといふことを仰しやつてあるの

で、決して何人をも距てない、皆同じ平等の慈悲心を以てこれをお教ひになり、又お教へになる。その心持を一子地と言ふ。これはなかなか難かしいことで、吾々共凡夫の思ひもつかないことでありますが、マアお手本としてさういふ心懸けを有つやうにするが宜しい。どうも吾々は近い所と遠い所とを區別する、親しい者と疎い者とを區別するといふやうに、自分勝手な區別を立てて、自分の親しい者には時々は親切にするけれども、縁の無い者はてんで振向いても見ないといふやうな所が兎角あるものであります。ところが一生涯世の中を通つて見ると、縁の無いと思つた者が後になつて大變縁の深くなる場合もあるし、大層親しいと思つた者が後になるとまるで疎遠になつてしまふこともあるので、人生といふものは非常に變化が多いから、今日の前のことだけでは判らない。だからこんな人間は相手にしないで宜いと思つていい加減にして置くと、後になると案外その人が大切な人になつて、前の疎遠にしたのを後悔するといふやうなことも随分ある。それだから出来るだけ目の前の差別を捨てて極く公平な平な心持を以て一切の人に接するといふことを吾々は常に心懸けなければならぬ。マア佛様の通りには急には参りませぬけれども、佛様の自分の一人子を可愛がるやうな心持で一切に接して下さるといふことは

これは實に尊いことであります。さういふやうな心持を以て折伏をされるのです。人の過ちを責めるとか、人の間違ひを責めるとかいふ場合でも、決して人を憎んだり何かして責めるのではない、親が子供に小言を言ふやうな心持を以て、どうも斯ういふ間違つた事を許して置いてはこの人間の不幸だ、又周囲の人間も皆その害を受けなければならぬからといふその大慈悲心からこれを責めるのであります。だから折伏する人を責めるといふ行ひの中に「何ぞ曾て攝受なからん」大勢の人を包容して皆を可愛がつて皆を優しくしてやるといふ心持がない譯ではない。表に現れる所は大層激しいやうに見えるけれども、心の中は本當に優しい、大慈悲の心持を以て一切に接して居られるのだ。斯ういふのであります。これはマア佛教を學ぶ者は勿論のことでありますが、苟くも世の中に立つて人の道を行はうとする者はこれだけの心持がなければならぬ。世の中に憎むべき者は誰もない、併し憎むべき者がないからといつて人の過ちを許して置けば人の悪い事を獎勵することになるから、そこで人を責めたり、人を咎めたりするのは、如何にも忍ぶべからざることであるけれども、そこは已むを得ない、慈悲を完うするが爲に人を責めもし、咎めもするのだ。斯ういふ心持で行くのであります。

さういふ譯でありますから慈悲心が本である。折伏といふ中にも攝受、大勢の人を包容するといふ本性があり、又「此經」法華經の中に安樂行品のやうに攝受を説いてある所もある。併しながら同じ法華經の中に「頭破れて七分となる」といふことがある。これは陀羅尼品の中にある言葉で、法華經の世に弘まる妨げをする者があるならば、その者は頭が七つに割れてしまつて命を完うすることが出来ない。まるで人間らしく生きて行くことも出来ないやうになるだらうといふことが言つてある。マア佛様はさういふやうにお考へになる。これは何も罪を犯した者を憎むといふ譯ではないけれども、併し罪を犯せばその罪の報いは自ら受けなければならぬといふのであります。

宗教に依りましては神とか佛とかいふものの罰を恐れて、自分の行ひを慎しまなければならぬといふやうに教へる宗教もありますが、法華經を中心と致しました大乘の佛敎に於ては、佛様なり神様なりが吾々に罰を與へるといふことは決して説いてない。罰は自分で受ける。自分で爲したところの報いとして自分で受けるのであつて、ナニモ佛様が吾々に罰を與へるのではない。だから罰が恐しいナンといふそんな小さい心持を起してはならぬ。自分がした事は自分で報いを受けるのが因果の理法

であつて、當然であるから、何も神様が罰しなくても、佛様が憎まなくても、自分で惡をしたらその惡は自分に來るに違ひなく、自分が善を行つたらその善は自分に來るに違ひなく、斯ういふやうな心持で、今法華經の中に頭が七つに破れるぞと言ふのは、お前が自ら罪を作つて法華經の正しい敎の世に弘まる妨げをするならば、その報いは必ずお前自身の身に向つて來なければならぬ。斯ういふ事を言はれるのであります。その事は法華經ばかりでなく、いろいろな經典の中に始終言つてあることで、影の形に従ふ如くであるとか、自ら作つた惡業は誰も自分に代つてその報いを受ける者はないといふやうなことは始終言つてあるのであります。若しさういふやうなことが考へられないならば、因果の道、正しい原因結果の道といふものは亂れてしまつて、世の中に正しい事は行はれない。そこで自分で罪を犯したならば、その罪は自ら受けなければならぬといふことが厳しく説かれてあるのであります。それだからさういふ點から言へば法華經の中にも折伏といふことが認められる譯で、罪を犯し、過ちを犯した者に對しては容赦なくこれを責めて、さうしてその人の反省を促すといふことが佛の敎としては極めて必要である。人はどうでも自分さへ善くして居れば宜いといふことは大變上品のやうに見えるけれども、實

を言へばこれは慈悲の心持の足りないことであります。行ひの上で言ふと人は嘘をついても俺は正直にして居るから宜いといふのは大變上品だけれども、自分の子供が毒の物を食べるのに、子供はどうでも宜い、俺さへ美味い物を食つて居れば宜いと言ふのは慈悲のないものでせう。それと同じことでせう。人が悪い事をするのを捨てて置くといふことはいけない、ちやうど悪い事をするのは毒を食べるやうなものだから、どんな方法を用ひてもその毒を止めなければならぬ譯であります。それを世間は世間、俺は俺といふやうに、悪い事があつても自分さへ淨らかにして居れば宜いといふやうなことは、慈悲の心持が足りない、一切の人間を自分の一家族のやうに思つたならば、これを捨てて置くことの出来るものではない。それでありますから折伏をやるのも、人を責めるといふことをやるのも、慈悲の心の現れだといふことを、涅槃經の中にも随分懇切に、あまり諄いかと思はれるくらゐに説いてあるのであります。それだけに説きませぬと、だんだん世の中が複雑になりますと、兎角に人間は利己的になりまして、人のことまで世話をやいて居る暇はない、斯うなつて来るのであります。どうも忙しくなると不人情になりまして、忙しくない静かな時に往來を歩いて居つて、人が鼻口を赤せば「もしもし、あなた鼻口

赤を見ますと、斯ういふ事が如何にも尤だと思ひます。それでありますから或る場合に於ては人の善を認めてこれを獎勵するといふこともしなければならぬ。或る場合に於ては人の間違ひを見たならば、更にこれを責めて少しも早くその過ちを直させるといふこともしなければならぬ。「各一端を擧げ」一端といふのは或る時は責め、或る時は奨めるといふやうに、その場合々々に依る。これは「時に適ふのみ」である。要するに人を責めるのが必要な時は責めるが、人を獎勵するが必要な時は獎勵するが宜いので、その場合々々に於て違ふ。この場合を考へるといふことが極めて大事なことです。同じやうに型の通りには行かない。幾度も同じやうな話を申しませんが、乗合自動車や電車などに乗る時に、人を突き飛ばして乗るのは悪いことです。「どうぞあなたお先へ」と言ふのは善いことであります。併しながら今自分の友達が途中で怪我をしたさうだと言つて急いで駆けつける時には「どうぞあなたお先へ」と言つて居つては間に合はないから、その時は已むを得ない、人を押除けて乗つて急いで行かなければならぬ。ただ人を押除けるが善いか悪いかといふことを議論しても仕様がなし。或る場合には人を突除けても大きな親切を盡さなければならぬ場合がある。或る場合には人を突除けないで、どうぞあなたお

が落ちました」と言つて注意してやる。ところがどうも大變賑やかな時に、明治神宮のお祭の時などの押合ひする所に行くと、人の鼻口など世話をやいて居る暇はない、そんな事をやつて居ると自分の鼻口を落してしまふやうになるから、そんな事はかまつて居られない、人の落した鼻口を踏んづけて行くといふことになる。同じ人間だけれども、閑な時には心に餘裕があるから親切である、忙しいと心に餘裕がないから、人のことなど世話をやいて居られない。斯うなつて行く。だから世の中がだんだん末になつて複雑な社會になると、別に人間が生れつき悪い譯ではないけれども、なんだか疎遠になつて自分の事ばかりやるやうになつて行くのであります。それだから世が末になつて行くと佛の大乗の教を學んで慈悲の心持を常に養ふことに心掛けないと、自然の儘に委して置けば、だんだん個人的になつて行くことは已むを得ない、法華經や涅槃經の中にはその事を随分叮嚀に言つてある。人を疎遠にしてはいけない、人が間違つた事をしたら直に直すやうにさせ、人が善い事をしたら、これを獎勵してその善い事を続けさせるやうにしてやれ、さうしなければお互の間はだんだん離れ離れになつてしまふ、世の中は生きる甲斐のないやうになつてしまふといふことを言はれてあるのであります。實際今の世の

先へと言つて誤つて居る方が善いこともある。それは前後の事情に依つて自分のその時の境遇に依つて違ふのでありますから、これを一概に教へるといふことは出来なない。それでいつでも心の根本をつくらなければならぬ。智慧を磨いて慈悲の心持を以てさうして小さい煩惱に執はれないやうな心持をチャンと作つて置けば、その場合々々に應じて皆適當な判断が出来る。その心の土臺をいよいよ加減して置いて、ただ形に依つて人にものを教へても、その形通りには行かない。私共も随分永い間學校の教師をして居て中學校の修身の時間を受持つたことがあります、學校で教へることが役に立たぬといふのは大概それでありませう。習つた事がその通りに現はれはしない、それだから役に立たない、その一つ一つの倫理道德の箇條を列べて、斯ういふ場合には斯うする、斯ういふ場合には斯うすると言つて教へるばかりではいけない。心の土臺を養ふことをしなければならぬ。それが信仰といふことの極めて必要な所以であります。だから正しい信仰を有つて立派な行ひをする人は他所から見ると何か矛盾があるやうに見える所がある。例へば日蓮上人だつて一生涯の六十一歳までになさつた事を見ると、これが同じ人のやうな事のやうには思へない。或る時は恐しい嚴重で人を叱りつけるかと思ふと、或る時は大概な過

ちは許してやるといふやうな態度に出る。いろいろ變化がある。それは今言ふ場合に應ずるので、優しくすることが世の爲であれば優しくするし、厳しくすることがその人に本當に善い教を與へるのであれば厳しくする。各々その宜しきに適ふといふことでありませう。マア吾々はなかなかそれだけの智慧もないし、徳もないから、一々うまく行く譯にも参りませぬけれども、理想としてはさういふやうな心持でなければならぬ。これを『時に適ふのみ』と天台大師は言つて居るのであります。

涅槃經の疏に云、出家在家法を護らんには、其元心の所爲を取り、事を棄て理を存して、匡に大經を弘む。故に護持正法と云ふは小節に拘らず、故に不修威儀と言ふなり。昔の時は平にして法弘まる。戒を持すべし。杖を持する勿れ。今の時は峻にして法廢る。杖を持すべし。戒を持する勿れ。今昔俱に峻なれば、俱に杖を持すべし。今昔俱に平なれば、俱に戒を持すべし。取捨宜きを尋て一向にすべから

つまり尊敬の心持を現はす。併し今天子様がお通りになる時にも土下座をする必要はない、チヤンと道の側に立つて頭を下げて最敬禮すれば宜しい。それを昔土下座をしたからと言つて、今陛下がお通りの時に、皆が道のまま中に坐り込んで取捨が附かない。そんなに形に執はれる必要はない、事を棄て理を存すれば宜い。敬ふといふ心持があればその敬ふといふ心持はの場合々々に應じて適當な現はし方をして居つたら宜い。ナニモ昔の形に執はれなければならぬといふ必要はないでせう。宗教の事も亦その通りでありまして、日蓮上人が念佛無間・禪天魔と仰しやつたからといつて、日蓮上人の仰しやつた四箇の格言をその儘此處で言つて見ても、例へば律國賊と日蓮上人は仰しやつたが、今律など守つて居る者は一人もない、律宗といふ宗旨はありますけれども、佛の律を守つて、魚も食べない、肉も食べないとやつて居る人は誰も居ない、今はそんな律は行はれない、行はれないものに對して、日蓮上人が律國賊と仰しやつたから律は怪しからんものだと言つて見たところで、的の無い矢を放つやうなもので、役に立たない役に立つ事をやつたら宜い、時代が違ふから、日蓮上人は法華經を弘める必要から所謂四箇の格言を仰しやつたのだから、今でもその精神に依つて、法華經を弘める妨げをする者は如

す等云云。

それから又涅槃經の註釋を妙樂大師が書いて居られますが、その涅槃經の註釋の中にも同じ事が書いてある。『出家在家』坊さんや又吾々のやうな世俗の人間であります、この出家や在家の人が佛の正しい教を護るのにその根本の心の持ち方が大事だ、根本の心の持ち方といふのは佛様の心持を自分のお手本として、飽迄正しい思慮分別を失はないやうに、飽迄自分の私を捨てて慈悲心を持つて一切の人に接するやうにする。これが『元心』根本の心掛けでありまして、この心掛けを失はないやうに、その行ひはその場合々々に應じてやれば宜しいので、『事を棄て理を存す』良い言葉です。形に現はれた所は昔の人のやつた通りを學ばないでも宜しい、併し人間の人間としての道理といふものは千萬年を通じて變らないものだから、その道理に違つて自ら適當な行ひをして居つたら宜しい。これは非常に大事な事でありまして、ところがどうもさう行かない、昔の人の眞似をしようと、その通りに眞似をしようと思ふから、今の時代に疎くなつて来る。昔は人を尊敬するといふ心持を現はす時には、土下座と言つて、地面の上に坐つて、下駄を脱いで手を突いてお辭儀をしたものであります。將軍とか大名といふやうな大變身分の高い人が通る時は土下座をする。それは

何なる者でもこれを排斥して行つたら宜いのであつて、日蓮上人が四つの宗を排斥したからと言つて今四つだけに限るといふことはない。その根本の精神をしつかりと捉まへて行かなければ教といふものは活きた世の中に弘まらぬものであります。そこで『事を棄て理を存す』と言つてありますのは洵にこれは尤なことでありまして、

それが匡に大きな佛の尊い教を弘める道だ。それだから『護持正法』正しい教を護つて行く場合には小節に拘らない、小さい事柄に拘らないで宜いのだ、小さい事は場合に依つて違ふから、例へば今申したやうに、昔は土の上に坐つてお辭儀をしたが、今では立つて敬禮するといふやうに、これは小さい事だ、一時的の事だから、そんなことに執はれないで宜い、根本の心持をしつかりと立つて行けば宜しい。さうして或る場合には『威儀を修せず』起居振舞といふことも、昔佛様が戒律の中に定められた通りの事をやらなくても宜しい。これはマアこの前にも申したやうに教をして居る時に行儀を良くしろと言つてもそれは駄目でありまして、行儀を良くして居ては教は出来ない。歩き方は足並が揃はなければいけない、體が曲つてはいけない、眼が横を向いてはいけない、と言つて居れば大砲を射つことも出来ない、飛行機を飛ばすことも出来ない、場合に依ればそんな形に執はれない

いで行かなければいけない。併し心持は飽迄人を怒れり、人を救ふといふ心持でなければならぬ。縦ひ人を殺す場合でも已むを得ずして殺す、一人を殺すことに依つて大勢が助かるから殺すので、殺すことを楽しみ、人に害を興へることを喜びとするといふ心持が假にもあつてはならない。根本の精神をしつかりと捉まへて行かなければならぬ譯でありませう。

それでそれは場合に依るのでから、昔の佛教が行はれた時代は世の中が穏かで泰平であつて、さうして法が能く弘まつて行くならば、さういふ場合には佛の戒を能く守つて日々行ひも言葉つきも間違ひのないやうにして行くが宜い、さういふ時に「杖を持する勿れ」武器を持つて人を攻めるといふやうなことはしないでも宜しい、又今の時代のやうに益々世の中が險惡であつて、正しい法が翳れて居るといふ場合であれば、武器を持つて敵を破つても宜い。さういふ時には又佛の戒律などはその儘持つて居なくても宜いのだ。今でも昔でも、いつの場合でも世の中が險惡であつて、正しい教を迫害する者が暴力を以て立つといふやうなことがあつたならば、いつでもこれを打拂ふ爲に武器を執つても宜いといふくらゐな覺悟をしなければならぬ。今でも昔でも世の中が平であつて正しい教が行はれて居れば、俱に戒を持つて行くが

宜い。何をやつて何をやめるかといふことは、それはその時々宜しきに適ふのであつて一概にこれをきめる譯には行かない。斯ういふ事が言つてあるのでありまして、洵にこれは尤であります。

ところがどうも斯ういふことが誤解され易いのです。佛の慈悲心と斯う言ふと、何でも優しくして人を咎めないのが、慈悲だといふやうに思はれ易い。それで日蓮上人が當時法華經を弘める爲に有ゆるものを排斥して闘つて、随分激しい折伏を加へられて居るのだが、その日蓮上人の精神を本當に汲む者が少かつた。それでそこを明かにしようといふのであります。

汝が不審をば世間の學者多分道理とをもふ。

いかに諫曉すれども、日蓮が弟子等も此をおもひすす、一闍提人の如くなる故に、先天

台妙樂等の釋を出して、彼が邪難を防ぐ。

「汝が不審」といふのは日蓮上人を非難する人でありませう。どうも日蓮といふ人は法華經を弘めると言ひながら佛の慈悲心にあまり一致しないやうな行ひが多い。どうも人を相手にして喧嘩腰で行くではないかといふやうな非難をする者が多いが、さういふ非難は所謂日蓮の精神

を能く知らないからやるのだけれども、さういふ事を言ふと世間の學者の大部分は、それは尤だと思つて、成程どうも佛の弟子として無暗に人を責めるといふことは大人氣ない話だ、モツと優しく教を弘めた方が宜いぢやないかといふやうに思つて居る。「道理をともふ」如何にそれを日蓮が誠しめて、さういふことではない、佛の精神はさういふものではないと言つて、本當のお釋迦様の御精神を説き明かしたつもりだけれども、世間の人は勿論のこと、この日蓮の弟子となつて居る者でもさういふ考を捨てないで、どうも自分の師匠の日蓮上人はあまり激し過ぎる。モチツと優しくした方が宜いぢやないかなどと批評して居る者が随分多い。これは當時日蓮上人の門下の中にはさういふ人が大分あつたらしい。この御書ばかりでなく他の御書にも折々見えて居ります。それで日蓮上人に意見をする者があつた。どうもそんなに激しくしても仕様がなから、モウ少し優しくしたら宜しうございませう、世間に敵を作らないで弘める方が宜いぢやありませんかなどと意見をした者があつたといふことを、佐渡でお書きになつた別の御書の中に言つて居られます。

さういふやうな譯でありますから、どうもさういふ事を捨てて置く譯に行かない。何故ならば佛の正しい教が

世に弘まる助けをする者とその儘捨てて置けば佛の教は弘まらなくなる。佛の教が弘まらないのを平氣で見ているといふことは、佛を信じない、佛を尊ばないことで、即ち「一闍提」佛を信じない者、信仰の無い者の仲間入りをする事だから、それは到底その儘にしては置かれぬ。そこで天台妙樂の解釋した言葉を以上言ふやうに出して、さうして「彼が邪難を防ぐ」彼といふのは日蓮を攻撃する人々の間違ひをここで防いで、その間違ひを直してやらうと思ふのである。そこでこれでチョツと一段落しまして、更にこの攝受折伏といふことに就いて言はれるのであります。(以下次號)

本佛實在の宗教哲學(十八)

河合 陟 明

十四、絶對的實在の條件とその體系構成(承前)

かくて實體の生成を論ずる形而上學としての宇宙論 Kosmologie は、必然に道德實踐と宗教信仰といふ價值論の領域に突き進み、これを包含せねばならぬ。實在と認識において形而上學は認識論を含み、實在と生成において形而上學は價值論を含む。Ontologie 本體論と Kosmologie 宇宙論と Epistemologie 認識論と Axiologie 價值論といふ、絶對的實在の條件たる四門、否そも我々人間存在そのものの自覺的發展體系としての四門は、こゝに全く一に完結する。形而上學こそ哲學本來の立場であり、使命であり、要請であり、課題であり、こゝにかの單なる科學的知識の總和としての雑多性でもなく、有限的・部分的知識の集合でもなく、眞に超時間的・無限的全體そのものを對象とするところの眞の形而上學・眞の哲學が存する。しかもそこに一面には先驗的・眞理的絶對としての無作本有の眞如、いはゆる根本實在としての *quid juris* 權利問題と、他面には經驗的・人格的絶對としての無始本有の本佛、いはゆる完全實在としての純價值的 *quid facti* 事實問題と、換言すれば本體論的絶對と認識論的アラス價值論的絶對、すなはち眞理の根柢と、それに據つて立つ覺者アラス救済者としての絶對的實在との、二面を双照大觀し、しかも前者が無始以來後者に包攝せられてゐるところに、すなはち眞如も本佛に包攝せられ、統覺せられ、統一せられてゐるところに、否、眞如および眞如に據つて立つ無始十界の全體が、その十界の一部にしてしかも全體を包む無始の統一的佛界たる本佛に統一せられてゐるところに、眞に宇宙の統一が存することを示すものでなければならぬ。

宇宙は人格的統一であり、宗教的統一であり、光明的統一である。時はいつでも包まれてゐる、宇宙はいつでも包まれてゐる、宇宙にはいつでも宇宙を包めるものがある、時はいつでも時を包めるものに於てある。それは何ぞ、それはたゞに眞如の超時間性のみでない、無作の眞如の超時間性をも無始に既に無始以來、無始無終に實現し顯現し包攝し統一してゐるもの、それが實に本佛の圓慈である。宇宙の諸法實相は、否、とくにその完全なる覺者における實相の認識としての意味において、本佛は常に毎に、宇宙の「永劫の流れ」を「永遠の今」に於て見るものである。然り而してその永遠の今の最も深い意味は、實に本佛の圓慈である。西田哲學をも開顯せば歴史を包む場所・宇宙を包む場所の、最も深いものは本佛の圓慈である。我々はいつでも生死を超えて「永遠の國」に安住してゐる、我々はいつでも本佛の「永遠の圓慈」に安住してゐる、安住しかつ躍動してゐる、そこに眞撃にして剛健なる躍々たる佛性向覺と脹々たる本佛の感應がある。宇宙は實に靜動相即の人格的・一元的・光明的統一である。そこに哲學および形而上學本來の課題たる、かつ道德および宗教本來の要請たる、*die Synthese von Weltall und Leben* 全宇宙と人生との綜合としての、*Weltverständnis* 世界理解、*Weltbeurteilung* 世界評價、かつ眞にカントを止揚し開顯し救済するところの *Welterkenntnis* 世界認識としての、*vollendete Totalität, Vollendung* 終極理想的完結體系なるものが存する。さてしからは是くの如き永遠の福音・無上の涅槃音としての、本佛の實在とは、いかなる構造を有するものなりや。以上において予は予の本佛の教學における第二篇と第三篇との梗概を示した。今やさらにその實體の何物なるかを示し來たらねばならぬ。

第四篇 日蓮教學における本佛實在論(其一)

十五、本有體系に於ける境智論の *quid juris* (根據)

今やいよいよ本論説の目的たる本佛實在の論證に進み入るべきこととなつた。而して如上に述べ來つたところは、この論證の基礎として、まづ根本實在たる無作の本有概念を分析して、理の本有概念を演繹し、すなはち有るは即ち有つてあり、有つは即ち知るであり、ゆるに本有は即ち本覺にして二者は全く一なるものであると共に、又これを分

つことを得て相対するものであることを見、ここに本體的と認識論的との二面のそれぞれの立場において、互に第一原理と考へ得ることを知つたのである。本體的には、有るといふ實體概念が、直ちに有つといふ所有概念に發展して、有の屬性が知であり、即ち本覺は本有の所有物であるが、認識論的には、知るといふ知識概念が、有るといふ實在概念を包攝して、知の内容が有であり、即ち本有は本覺の從屬物となる。而して眞に完全なる絶対といふべきものは、すでに絶対なるものの條件において糺説したる如く、單に本體的なる無自覺的ないしは盲目的なるものではあり得ず、否たとし本體的實在は盲目的なるものではなくして唯心實在であるとしても、未だ單に先驗的なる純粹自我、佛教にいはゆる眞如我、法性我、すなはち未だ單に理的なる超個人的普通の法界我、主客未分の超時空的・一大理性的佛性、予のいはゆる無作の覺自體といふ如きものではあり得ず、未だ何等の限定をも受けざる、限定以前・時間以前・歴史以前・歴史の根柢たる、いはゆる根源的主體性たる如きものではあり得ず、必ずその無限の限定を完了して限定を超越したるもの、高次の超限定者、すなはち章安が大涅槃經支義の劈頭に高唱するが如く無明生死患累、究竟新亡、生死永滅、免新因果患累(時は迷妄の影である)また因果畢竟、是圓淨解脫(時は希望の影である)論云、智度大道佛善來、智度大海佛寫、即其義也。智度者、如如智稱、如如境、兩大義大、照發相應、故名智度、論云、智度相義佛無碍、即其義也。(時は永遠なるもの影である。その限定を了りし超時間的永遠者こそ眞の我れである)といふ如き自覺としての絶対、ゆゑに人格としての絶対、眞に我れとしての絶対、すなはち認識論的なる絶対でなければならぬのであるから、したがつて予のいはゆる本有即本覺體系に於ける、その無作の本體的な方向に對し、實にそれを包むところの無作の認識論的方向を逐うて、そのノエシスの極限に達したるもの、したがつて本體的な絕對を認識の絕對に於て完全に把握し包攝したる絕對者、しかもそれは必ず有始でなければならぬにも拘らず、しかも有始に非ずして全く無始なる完了者としての絕對たる實在に於て見るべきであつて、ここに正しく眞如を體現せる無始本佛實在の論理が成立するのである。これを更に佛教的表現においていへば、智が境に冥合してしかも智に境を包み、更にその無限の系列を窮めて無始を盡せる無始過去完了の智的絕對に達し、否更に一步を進めて、かかる無限にして無始なる系列を綜合し、その純粹內面的貫通による唯一的絕對の統一體系としての實在に達したとき、換言すれば、法身理智の無作先驗的根柢に立つて、しかも報應事當の無始經驗的完成たる佛陀の存在といふ眞の人格實在に達したとき、

更にその全宇宙世界に對する無始以來の人格的統一なるものが認識せらるるに至つたとき、ここに始めて正しく本佛の實在が論證せられるを見るのである。

日蓮聖人、成佛用心鈔に云く

夫法華經第一方便品云、諸佛智慧、甚深無量云云、釋云、境深無邊、故云甚深、智水難測、故云無量。抑も此經釋の意は、佛に成る道は境智の二法にあらずや。されば境といふは萬法の體をいふ、智といふは自體顯照の姿をいふなり。しかるに境の深ほとりなく深きときは、智慧の水流ることつがなし、此境智合しぬれば即身成佛するなり。法華以前の經は境智各別にして、しかも權教方便なるがゆゑに成佛せず、今法華經にして境智一如する間、開示悟入の四佛知見を悟りて成佛するなり。

天台智者、摩訶止觀の第一發大心章において、まづ約三諦顯是、ついで約四弘顯是、前者については推法性、見佛相好、聞法、觀衆苦等、乃至十種の發心を列ねて多約、解明三上求下化、後者については多約、顯明三上求下化、しかも通じて四教に經てこれを檢討したる後、ただ圓頓の一是を擧げ、さらにこの圓實の一是の異名として、「一大事因緣」と、「三諦法性の不思議」と、「無作體」としての常境無相、常智無緣、以無緣智、緣無相境、無相之境、相無緣之智、智境冥一、而言三境智、故名無作一也といふ圓頓無作の妙觀におけるノエシスノエマ即ち實在と認識の關係との、三者を掲げ、結んで即ちまさに、舉要言之、此心即具一切菩薩功德、能成三世、無上正覺と道破せるが如く、佛教の目的たる佛陀論最後の問題も、また實在にただ境すなはちノエマ的實在の完全性と、智すなはちノエシス的認識の完全性と、結合如何の問題に存するのである。

今や本佛の實在認識に入らんとするに當り、今一たびかのカント乃至ハイヒテ・ヘーゲル等の例にならひ、しかも佛教固有の地盤において、かつ予の本有哲學の構造中において、極めて大綱的に、この佛智の認識といふ絕對の *quid facti* 事實問題が、いかなる *quid juris* 權利問題において實現せらるるか、即ちいかなる *Rechtsgründen a priori* 先驗的真理根據、あるひは *Möglichkeitsergründen a priori* 可能根據によつて成しとけらるるかを一瞥して、然る後問題の核心に突き進みたいと思ふ。その根據とは即ち、いはゆる無作本有すなはち眞如における境智の關係であるのである。換言すれば、有と知との *Datation* 演繹關係、あるひは *Analysis* 分析または *Abstraktion* 導來の體系的順序で

あるのである。

實在とは何ぞや、そもそも何等の意味においても絶対無條件的實在とは無作にして本有なるものであり、而して本有とは本來有なるもの即ち本來有るものであり、その本來有とはさらに本來所有であるのであり、否、本來有とは本來有つものとして寧ろ本來能有であるといふべきであり、しかも能有は必然に所有を要するがゆゑに、本來有は本來能有と所有との総合としての統一體系たるべく、而してその有つといふことの唯心論的または純論理的意味は實に知るといふことであるのであつて、此において無作の本有體系は一轉して無作の本覺體系すなはち理本覺體系あるひは先驗的統覺體系、またすなはち超個人的純粹自我の體系となれるものであることを見るに至つたのである。而して知はその本來の意味として「ものを有ち」、「有を包む」といふ性質を有ち、あるひは働きをなすのであるから、有より出でたる知・本有より出でたる本覺は、翻つてその本有そのものを包み、それを有ち、それを照し、それを見、それを知るものとなる。初め本體論的に有即ち實在が知即ち認識を包み、本有が本覺を有つてゐたのであり、即ち本有してゐたのであり、これに對して本覺は本有の實在の内容として、有たれてゐるもの本有されてゐるものであつたのであるが、今や認識論的には、最初の根本實在すなはち第一原理としての本有なるものより出でたるところの本覺といふ知が、却つて翻つて最初の本有の實在を包み、しかもその全體を包む。即ち根本なるものより出でたる部分的なるものが、却つて全實在そのものを總て包み了り、それを自己の内面に有ち、内面に照し、自己そのものが却つて全體となり、否、全體よりも大なるものとなる。最初のいはゆる根本的全體を却つて自己の内面に包んで部分的なるものとなすに至る。而して認識論的には又この本覺の知を第一原理と名けることが、一層妥當であると考へられるのである。

しかし更に反省するならば、これは必ずしも一より他への轉回ではなくして、同一の事をいつてゐるに過ぎない。何となれば有より知を出だすといふことは、思想開展の順序いはゆる先驗論理的演繹または導來の順序たるに過ぎないのであつて、元來、有るとは有らしめることであり、有らしめるとは有つことであるといふところから、有らしめられるもの即ち有たれるものを相對的に展開し分析し、據つて以てこの二面を必須の *Komponenten* 要素として、綜合的に一大本有即本覺概念を構成したものであるから、有るものは即ち有つものに外ならないのである。 *Dunkelheit*、*Homogeneity*、*Homogeneity* 演繹順序における第一の有は第二の知そのものに外ならない、即ち本有は直ちに本覺に外ならないので

ある、實在原理はそれが直ちに認識原理をなしてゐるのである。しかしかくして既に一たび認識といふ以上は、これに對して對象がなければならぬ、内容がなければならぬ、智に對しては境がなければならぬ、空に對する假がなければならぬ。それは何であるか、何れにあるか、何物に求めるか、何處より發するか。それは方しく第一の根本實在たる本有いはゆる無作の本有そのものが、この對象となり内容となり、即ち知られるもの見られるものとなり、從つて即ち、換言すれば有たれるものとならねばならぬのである。

第一の本有は最初まづ第一原理として一切を有つもの一切を本有するものであつたのであるが、次でそれは方しくその有つものとしての根本性質が知るものとしての意味を有するものであることが知られるに至つて、本有は即本覺となるに至つた、實在の演繹 *Deduktion* においては本覺は第二の原理である。然るに更にその本覺の知の對象が求められるに至つて、ここにその所求を充足するものは、翻つて再び最初第一の本有の實在そのものであらねばならぬこととなつた。此においてそれは演繹順序においては第三に來たり、*the third* に位するものとなり、認識原理としては本覺の必須的聯關の對象内容となることになつた。第一の意味における有つものとしての本有、即ち根本的に一切を——從つて全法界の一切を——有つものとしての本有、從つて寧ろそれは有つといふよりは全法界・全實在そのもの・絶對的全體そのものとしての本有といふ實在は、ここにおいて第三に來つて有たれるものとなるに至つた。かくしてそれは先にもいつた如く意味の轉換或は位置の轉換を來たして、有つものは有たれるものとなつたのである。本有といふ實在性そのものは變らず、又變り得るものでもなく、變らせ得ないものであり、存在の如是性は實在論的に本有不改のものであり、したがつて認識論的に覺了不改のものであつて、そこには何物の加はるべき餘地なきもの、いはゆる虚空佛性、寂照靈知なるものであるが、しかし意味的には一種の轉回でもある。かくて本體論的に有つものは一轉して有たれるものとなり、これに對して認識論的に、即ち眞に自覺的に、換言すれば眞の人格的知識として、有つものは本覺となる。しかもこのときそれは既に理の本善が事として始覺となつたときであるのである。本有が今有となり、今有において本有が顯れたとき、今有として本有が自己を實現したときであるのである。デカルトの *cogito*、我れ思ふ、カントの *Ich denke* 私が考へる、或は *die Zeit bleibt* 時みづからはとどまるといふべき——しかもかかる思想を一層東洋的に深化したる——西田哲學における無の場所すなはち眞如の體驗が、ここに一人格におけ

る永遠の自覚として眞理の直観として、いはゆる天台の觀心として法性の止觀として現れきたるのである。

而して今、本有と本覺といふ兩者の間の交互轉換關係あるひは可逆反應作用は、超時間界における全く純粹なる先驗論理として成立することを見たのであるが、かかる理として無作の先驗的眞如におけるこの二様の包攝關係が、その無限なる時間的開展を経たる事の極みとして、しかも又その無限の過去に遡源するも常に *had been, had done, fortig sein, geworden sein* 完了者としてかつ統一者として君臨するを見ること、事の無始の經驗完成の實在たる本佛果上に至つて、卓然として同じく成立せるを見るのである。否、元來、如上の思來的努力は、本佛における *quid in se* 現實の *quid in se* 根據を求めて、かの理門における本有と本覺の先驗關係を探つてきたのである。然らば事實の極果におけるその關係は如何。一はまづ本佛における「事體と内智」といふ能所二面の包攝關係であつて、即ち事體といふ人格の内容とし所包として佛智を考へねばならぬことである。それはまた「有體知用」ともいふべき體用の關係を、有と知すなはち實在と認識が保持してゐるのであつて、その有の事體を中道と呼び、これに對する内智の用の中にさらに空假二諦といふ二面がある、しかもそれはこの二面なくんば凡て知識といひ否意識といひ然り人格といふものが成立せざるところの、*conditio sine qua non* 必須不可缺條件として、この二諦の關係が成立つてゐるといふ關係にあるのである。しかもその假諦といふは即ち翻つて最初の全體なる有の事體すなはち中道そのものに外ならぬ。ここにおいて有は根本なる「包む有」と反省せられたる「包まれる有」との二つに分れる、否、詳しくいへば三つになるといはねばならぬ。換言すれば、有が自己の内に自己を包む。すなはち、有が有の内に有を包む、第一の有は中道であり、本佛の事體であり、第二の有は空諦であつて、これが本佛の内智であり、第三の有は假諦であつてそれは再び本佛の事體を指す。この *quid in se* 根據を一心眞如の自覺的關係に求むるとき、天台妙樂が、法華文句における如是我聞の我の觀心釋において、

觀心釋者、觀三因緣所生法、即空即假即中、即空者我無我也、即假者分別我也、即中者眞妙我也云云……此文已當、約教觀心、心境相對、因緣觀也、眞妙空餘、本迹觀也、以心觀心、觀心觀也、

南無妙法蓮華經

卷第十七、法華經十卷、觀心釋、觀心釋において見す

大東亞建設と宗教

平山三藏

靜に大宇宙を諦觀すれば、渾然たる一體にして意志あり、精神あり、更に靈格者あるを認む。一切の萬物に惠澤洽く及ぼし、愛撫愛護至らざるなし、宛も人身に精神あるが如し。之を以て賢哲の士、人を小宇宙と曰ふ、從て宇宙の本體本質を究めむとすれば、吾心の本體本質を明らかに、

天地の圓滿無邊の靈徳と照應して自得するにあり。孟子曰く、心を盡すものは性を知る、性を知る者は天を知ると、之れ絶對に達し實在を握れるものなり。此處に人身觀宇宙觀神佛觀の不動の信念を把握するに至る。蓋し此境地に達するは容易の業に非ざるなり、これ哲學者の理智の力に因りて達し得ざるを嘆ずる所、則冷靜なる理知、清新なる感情、剛健なる意志、心の全體の力を統一し、言行實踐には博愛仁慈の大精神を發揮し、内外研鑽内薰外薰機縁熟する時、豁然として智眼開け、靈珠燦然として光を放ち、大は宇宙の精神より小は人心の機微に至るまで歴々視るべし。自然界の現象は靈光輝き、天國の現

前せるを視る。此境地に在りて靜觀するに、天意を世界に實現するの道一に人心の教化のみに依りて達し難く、印度支那聖人發祥の地に思を馳せ必ずや列國を統一總攬する理想の國家の存在せらるべきを思ふ時、我が國體の無上尊嚴に深き感激を覺ゆるなり。

夫れ靈性の啓發は、智徳圓滿の果報にして天資自ら其美德を具ふる士にして望むべく、普く大衆に望み難しとする處、此處に超人靈格者釋迦如來の出現あり、法燈を高く掲げて萬物の最靈たる人道に一大光明を與へられたり。知あるもの、知なきものも洽く教化に浴して精神に活き、道を求め道を樂ましむ、宗教の興る人の本性に根ざし自然の要求あり、上は宇宙神靈の人類救済の神意に出づ、宗教の人を救ひ世を濟ふ重大使命ある所以なり。熟々世界の歴史を一瞥すれば、各種の民族國を樹て各々主とする所あり、鬭争の歴史は悽慘を極む。仰て皇國日本の出現を拜察すれば、神祖萬世一系の御神勅あり、

皇宗 神武天皇 天業恢宏八紘爲宇の詔書煥發あらせられ、爾來二千六百餘年 神子 神孫統を承け至仁至慈 皇室の靈德御稜威は深く海内に感孚し、倭德彌々輝き、今や八紘を掩ふに至る。天に二日無く地に二王無しとは絶對の眞理なり、天下萬民各々其處を得、其生を樂み相扶け相親み渾然たる一家を爲すは、宇宙神靈の意志にして 皇國の理想使命正に此處に在り。個人を小宇宙なりと曰ふ哲理を開顯し來らば、個人の意志は 皇國の意志に合一し、皇國の意志は 天意に契合す、三千年の歴史に蓋み 神聖にして體用不二、國體の無上尊嚴に更に感激を新にする所以なり。

今や世界肅正の機運到り、樞軸反樞軸の二大陣營に別れ、熾烈極まる戦は展開せられつつあり。我國は日支事變より大東亞戰に擴大し、三軍決死の敢闘は世界を驚倒せしむる奇蹟的戦果を収め、大東亞建設途に就かんとす。之れ實に八紘爲宇の大理想實現に巨歩を進むるもの、此の空前の事局に際し宗教各派其天職に省み、深謀善慮職責を完遂し以て、聖明に應ひ奉らんとす。今日の學其誠意の顯現として深く敬意を表するものなり。

抑も我國には古來惟神の道あり、儒教支那より入り、佛敎印度より傳り、日本化して三教鼎立相輔り相扶け、日本文化の進歩に莫大の功を著せり。然るに今日、科學の發達と共に、文化進歩上最も尊貴すべきは言を俟たざるも、人生を指導する重任は宗教哲學にして、科學は謹みて教を乞ふべきは自明の理なり。今や世界維新の鴻業は、歐米の霸道文化を擊破して大日本の皇道文化を建設するにあり。然らば理想の宗教とは如何。茲に宗教學より宗教の公理公則として學界の公認する條件を掲げ來りて審に検討せん、先徳の語に、

宗教の本質とは

- 一、人間の全體と人生の實相を明にし、
- 一、宇宙には超人的靈格者の實在を信じ、
- 一、兩者の感應に依りて精神的法悦を得、
- 一、道義的感情を養ふて過を改めて善を行はしむ、
- 一、此の教化を以て人類文化の一大要素を成すものなり

之れに依りて之を視るに、宗教は人身觀宇宙觀を明かにせる哲學を基礎と爲すものにして、哲學と宗教、理智と情操とは渾然融合一體を爲すものなり。今日歐米に於て哲學と宗教理知と信仰の握手は、二十世紀最大の問題なりと唱道せるを視れば、明かに宗教の完壁に非ざるを證するものなり。我が東洋の佛敎、特に大乘佛敎の首位に在る法華經に至りては、宗教學の公則に照して善盡し美盡せるを視る。即ち法華經藥草喻品に「我は是れ如來なり」

開化の維新千古不世出の偉人聖德太子、三教は天極の自有にして人造の私則に非ずと宣言せられ、三教協調皇運扶翼に貢獻せる卓見は後世の師表として仰ぎ視る所なり。明治維新創業に際し、佛敎は時世の進運に伴はざるものとして排佛毀釋、國民教育亦宗教は迷信なりと獨斷するに至る。教育反りて科學迷信の弊に墜ち、信念無き教育は輕佻詭激の風を生じ、漢字廢止論等起りて更に拍車を加へ、東洋文明の權威地に墜つ。歐米の新思潮は滔々として流入し、晴天の霹靂曰ふに忍びざる大逆事件あり、最高學府は學術研究を名として危險思想の温床と化し、秀資問題は炎々として燎原の火の如く遂に五・一五事件あり二二六事件を生ずるに至る。宗教を排斥し精神敎化を輕視せる弊顧みて慄然たらざるを得ざるなり、澎湃たる驚瀾怒濤を克服し、日支事變より大東亞戰に進み、驚異的戦果を挙げ、巍然として東海の天に富嶽の威容を示せる 皇國日本の眞相は、歐米人の容易に窺ひ知る所に非ざるなり。

今日大戦下大東亞建設に直面し、往ては世界の新秩序を樹立し、八紘爲宇の理想を實現せんとする秋、宗教の使命極めて重大なるを感ぜざるを得ざるなり。

夫れ世界の中心に立ちて世界を指導せんとする國民は、人類文化の進歩に莫大の功を著せり。然るに今日、科學の發達と共に、文化進歩上最も尊貴すべきは言を俟たざるも、人生を指導する重任は宗教哲學にして、科學は謹みて教を乞ふべきは自明の理なり。今や世界維新の鴻業は、歐米の霸道文化を擊破して大日本の皇道文化を建設するにあり。然らば理想の宗教とは如何。茲に宗教學より宗教の公理公則として學界の公認する條件を掲げ來りて審に検討せん、先徳の語に、

宗教の本質とは

- 一、人間の全體と人生の實相を明にし、
- 一、宇宙には超人的靈格者の實在を信じ、
- 一、兩者の感應に依りて精神的法悦を得、
- 一、道義的感情を養ふて過を改めて善を行はしむ、
- 一、此の教化を以て人類文化の一大要素を成すものなり

之れに依りて之を視るに、宗教は人身觀宇宙觀を明かにせる哲學を基礎と爲すものにして、哲學と宗教、理智と情操とは渾然融合一體を爲すものなり。今日歐米に於て哲學と宗教理知と信仰の握手は、二十世紀最大の問題なりと唱道せるを視れば、明かに宗教の完壁に非ざるを證するものなり。我が東洋の佛敎、特に大乘佛敎の首位に在る法華經に至りては、宗教學の公則に照して善盡し美盡せるを視る。即ち法華經藥草喻品に「我は是れ如來なり」

經濟産業文化あらゆる部門に互りて基礎となり、原動力となりて最高の文化建設を完遂するものなり。

以上概ね説明する如く、日本の有する大乘佛教は、我が冠絶せる國體と照應して世界の双璧と云ふべし。今や米英の敵を撃退して大東亞建設の段階に進む、而かも戦局の前途容易に樂觀を容さざる秋、宗教各派刻下の重大時局を看破して積極的對策を樹立し、鴻業完遂に生命を捧げんとす。雄渾なる精神瀾大なる雅量必ずや完璧の策を樹てん。此處に局外として左に希望條件を述ぶ、他山の石として参考の資料とならば幸甚なり。

一、宗教各派各々教義を明かにし、簡明適切に解説小冊誌を作成し、全國國民學校より總ての學校に頒布普く公衆にも及ぼし、國民宗教心の喚起覺醒に奮起すること。

一、宗教各派時世の大變化に順應し、從來の陋習を破りて面目を一新し、宗教の權威を發揚すること。

一、國體の眞義を闡明し、國民精神の昂揚に励め、思想戦の中堅を以て任ずること。

最後に文政當局に謹んで懇慮を請はんとす、今や國民教育改革成り、心身鍛錬に、知能啓發に、全力を注ぐの秋、教育の源流する處、宗教育學と一元的に

記事

本部 團報

十一月八日 大詔奉戴日第十一回記念日に相當するこの日曜日に於て、更に立正大師の小松原御法難追憶を新にすべく十四時から御寶前に遊樂した團員諸友各位は和賀、小西師を中心として嚴修、戰捷祈願並に陣病疫諸靈の追福回向と、又大聖人死身弘法の護法愛國の至誠報謝に擬した後、兩師から意義深い精神の糧を與へられた。

凡そ正義を貫徹せんとするに際しては必ず幾多の障礙が横ひ起るべきである、それはこの私共の住める欲界に於ては、第六天の自在化他天王が頑強つてゐて、人々に貪欲、瞋毒、愚痴といふ酒を飲ませ、それに邪惡の肴を極めて三惡道に引墮さんとして居る、この強烈な無形の頭敵を撃破するには容易の業ではない、極めて剛健な精神を以て之に加ふるに偉大な佛力の加護を被つて初めて大勇猛心が奮ひ起ち一切の善事が執行されるに到る、これを經には「是の人は大信力及び志願力、諸善根力あらん」と説かれて居るのである。即ち現在御佛に護念せられて居るといふ本佛渴仰の純信が基となつて菩薩の四因誓願となり、これが

と懸るべからざる關係にあり、信念あり生命ある徹底せる教育は、健全なる宗教と固く握手するにありと信す。希くは此の機會に於て、理想の宗教復興の貫徹に全幅の支援を與へ、以て皇國の重大使命完遂に萬全の策を樹てられんことを。

團費誌料維持費及寄附金領收 (自十一月二十一日)

金參	圓也	東京	萩野	三股
金拾	圓也	東京	小高	清股
金參	圓也	同	宇野	順股
金參	圓也	同	鈴木	郎股
金壹圓六拾錢也		福岡縣	大久保	市股
金貳圓貳拾錢也		東京	藤間	子股
金壹圓	圓也	市川	小澤	重股
金貳圓貳拾錢也		東京	安井	吉股
金貳圓貳拾錢也		同	武中	藏股
金貳圓四拾錢也		同	兵衛	三股
金貳圓五拾錢也		上海	出海	福股
金貳圓五拾錢也		上海	石山	惠股
金貳圓貳拾錢也		萩	平山	藏股
金參	圓也	千葉縣	種村	三股
金貳拾	圓也	東京	関野	美股
金貳圓貳拾錢也		東京	牧野	清股

右難有入帳仕候也 (以是領收書代用)

實踐に現はれては、我々今日より復自らの心行に照らし、新見、眞實、誠意、謙遜の心を生ぜし」と妙莊嚴王は述べて居る。深恩すべきである、實に信心第一肝要である。

かゝる理智の上からも、情操の側からも、意志の堅からも完全無缺な正信を人々に與へんとして七百年の昔、立正大師は數へ切れない法難に値はれつゝ、「一難來るとに彌々喜びを増すべし」と追書の中にいつも法悦に安住されつゝ、我等の爲に大なる菩薩の淨業を成就遊ばしたのである、寔に知るも知らざるも感謝報恩の念なくして可ならんやである。時局に照して一層深く感激を新にする。南無妙法蓮華經

信行會 毎月曜日朝霧を踏んで拂曉六時から、潑刺たる若人の燃ゆる道念に、聲高々と勢よく修法が響まれるその森嚴莊重なる自ら懽を正し、身心の淨潔を覺ゆるこの正定聚は、全く時代を救ふものであるの感を深める、有難いことである。機手には兎角理窟張りたがるものだが、只大綱を存して細目に論及せぬやうに心がけねば、世に處するに面倒ばかり多くなるであらう、「一切諸佛は二言あることなく、能く一言を以て普く衆の聲に應じ、能く一身を以て百千萬億那由他無量恒河沙の身を示し、一々の身の中に又若干百千萬億那由他阿僧祇

恒河沙種々の類形を示し、一々の形の中に又若千千萬億那由他阿僧祇恒河沙の形を示す。善男子、是れ則ち諸佛の不可思議甚深の境界なり、二乗の知る所に非らず、亦十地の菩薩の及ぶ所に非らず、唯佛と佛とのみ乃し能く究了したまへり」と。一番の御題目、南無妙法蓮華經の深意押て知るべき、凡愚の迂曲曲解を要せず、率直に信受する人を智者と申すのである。經には「諸の有ゆる功德を修し、柔和質直なる者は、則ち皆我身に在つて法を説くと見る」或は「惡業の因縁を以て阿僧祇劫を過ぐれども三寶の名を聞かず」とある。「汝等皆あらん者、此に於て疑を生ずること勿れ」なれど、結局は其の果報によるものか、勤加精進すべきである。貴し。々々。

婦人會 第一と第三土曜日十四時より開かれてゐる、十一月は石井智慶尼の清授を得て、修法後、日蓮聖人御一代記並に蜘蛛の絲等の紙芝居を以て諸師の信仰増進をはかられ、磯部先生からは御道文に據つて有難い御話を聴聞することを得た。由來御信心をして居れば現世安穩であり、後生善處であるべきと思ふに、却て惡事災難の蜂起するのはどうしたことかと思ふ。是れは經に「世間には諸分ある。處が法華經には難信難解とあつて、六難九品が示されて居り、大聖人は、未來に於ては、此の如き事あり」と

大風吹けば求羅は倍増するなり、扱は萬年のよはひを持つ故に扱をまげらる。法華經の行者は火と求羅との如し、薪と風とは大難の如し。法華經の行者は久遠長壽の如來也、修行の扱をまげられ、まげられん事候ひなるべし」と。正しき信者に對しての大難續出を當然とし、扱ふべき現象として、「今生の小苦なれば、扱ふべし」と激勵され、は「此經難事」の大切なことを説へられてゐる。

所詮人が災難を厭ひ死を恐れるといふことは、後生の不安を想ふから來ることなれど、我が死後は現在よりも遙かに幸福な境界に到るものだといふことが確信出來れば、歎んで死地に就ける譯であるまいか。かの雪山童子が僅か半偈の爲に身を捨て、大聖人が身輕法重、泰然として死地にあつても「これ程の喜、笑へかし」と近く周圍を眺まされたのも皆、未來の成佛に希望が輝いてゐるからである。天台大師は「魔業はずば正法と知るべからず」と述べ、大聖人は「潮の干ると満ると、月の出ると入ると、夏と秋と冬と春との境には必ず相違する事あり、凡夫の佛になる又かくの如し、必ず三障四魔と申す障り出で來れば賢者はよるこび愚者は遠くこれなり」と兵衛志郎に教訓されてゐる。お互に信する者の干來時、心にかけ置くことであるまいか。日蓮

今生の祈りなし、唯佛にならんと思ふばかりなり」一見消極のやうに思はれるであらうが、これ程積極も積極、大きな誓願はないではあるまいか、知法思國の誠意こよりに發る、家庭の悦樂ここに根ず、有難いことである、いよ／＼強盛の大信心を出して報恩の實をあげたいものである。南無妙法蓮華經。

福島 教信

高南例會 十月二十四日午後三時、生徒課長川村教授の御好意により如春莊に於て開催し、橋本先聖より日蓮聖人の御人格、教義、如來の豫言等淳々としてお話を承り又十一月十四日の土曜日午後にも引續き大聖人の御主要を聴いて多大の教訓を興へられた。

町會 十月二十九日例の通り大町中村様の自宅を公開されて法の集ひを見た、橋本師から戒律に就てのお話があり、途中幸にも御來訪下さつた福岡さんや原田さんが信仰上の御體験を述べられたり、御感想談などあつて時の過ぐるを覺へず、漸く十一時頃散會した。み佛の御せらるゝ通りこのお互の清い聚りが大きな護持正法である、今法久住なんである。有難いこと又南無妙法蓮華經。

本多日生上人著書特價提供

聖 語 錄	改 版 特 價	金壹圓九拾錢
法華經要義	同	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	同	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	同	金貳圓九拾錢
法華經要品	同	金五拾錢
本尊意識に就て	同	金貳拾錢
法華經の心髓	同	金壹圓五拾錢
黎明の原理	同	金五圓
磯部滿事講解	特 價	金壹圓七拾錢
本多日生上人	同	金拾錢
勤行作法	同	金壹圓
佛教の心髓	同	金壹圓
河合妙明著	同	金壹圓
皇道と日蓮主義	同	金壹圓

東京市小石川區音羽町六十七番
財團法 統 一 團 出版部
振替東京九四二〇番

一冊 金壹圓貳拾錢	送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢	送料貳錢
一ヶ年 金貳圓貳拾錢	送料貳錢

注意 ○前申込へ總テ前金ノ事 ○前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可 ○御轉居ノ場合ハ必ず新書共ニ御通知ノ事

昭和十七年十一月二十七日印刷納本
昭和十七年十二月一日發行
(第五百七十三號)

發行所 財團法 統 一 團
東京市小石川區音羽町六十七番
東京市四谷區內藤町一
印刷所 野島好文堂印刷所
東京市小石川區音羽町八ノ十一
電話牛込六九六六番

發行所 財團法 統 一 團
東京市小石川區音羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

配給元 日本出版配給株式會社

目 次

○本部園報	○福島教信	○入帳報告	記 事	宗 教 と 道 徳	本 佛 實 在 の 宗 教 哲 學 (十 八)	開 目 鈔 講 話 (第 四 十 六 講)	遺 文 に 於 け る 五 大 要 義 (五)
			
				本 聖 院	河 合 陟 明	小 林 一 郎	本 多 日 生

第 四 十 八 年 一 月 號

統

一

法財人團
統

一團發行